

## 「院内救命処置研修の効果と今後の展望 ～看護師による看護師のための救命技術研修」

○重症集中ケア認定看護師 山本 晶子  
専門ナースの会 委員長 太田 純代  
教育委員長 梅崎 淳子

### 1. はじめに

当院では、平成16年より日本救急医学会認定の\*ICLS コースを開催しているが、院内外に向けた研修であり院内の看護師が受講する機会が少なかった。そこで平成17年2月ICLS認定コース修了者の中からインストラクターを募り、院内の看護師のみを対象とした「第1回院内救命処置研修」を開催した。研修内容は日本救急医学会認定のICLSコースと全く同じであるが、学会認定がないものであるため受講生に認定証を発行することはできない。しかし、第1回の研修内容は非常に充実したもので世界標準の救急蘇生法を学べた受講生の満足度は高く、指導者側のモチベーションも向上した。その後、平成17年度より教育委員会の専門ナースの会主催として認められ、ACLSチームとして専門ナースの会の中に新たな分野も設立された。従って第2回以降は教育委員会の年間計画の中で開催、昨年10月、第2回研修を終了した。(今月2月に第3回終了)

そこでコーディネーターとして運営に関わった中で研修の概要とアンケート結果を分析し、その効果を報告するとともに、今後の展望を見出す。

\*ICLSコースとは日本救急医学会が認定する、“突然の心停止”に対して直ちに対応する、という意味でImmediate Cardiac Life Supportの略である。

### 2. 第1回研修の準備から開始までの実際

平成16年11月に第1回研修開催のための準備を開始。教育委員会を始めとする関連部門に開催許可を得て、研修案内を配布した。募集

人数は受講生15名、インストラクター16名としたが受講応募総数28名で約半数は辞退して頂いた。その他救急部医師、研修医の協力を得て準備を進めた。研修に必要なシュミレーターは業者より直接レンタルしており、福岡県内でも同様の研修が週末各地で行われるため確保が困難となり、早期からの予約を必要とする状況である。研修に必要な会場の準備は西7階使用の許可をもらった。

指導者側はロールプレイングを行い、スキルの確認とプレゼンテーションの練習を行った。前回の研修からは時間が経っており、スキルを忘れていたインストラクターもおり、受講生役をしながら手技を思い出していた。(計7回ほど練習のため集合)

インストラクターは3ブースに別れ、各セッションを担当する。ブース長は各1名ずつで各セッションのコンセンサス(指導案)の作成を行い、検討後、他のインストラクターにコンセンサスの共通理解を進めてもらった。打合せ日数は約7日間、その他関係者打合せ日数5日間であった。受講生には研修参考資料として、ICLSコースガイドブックと当日スケジュールを配布し事前学習の案内をした。研修日前日には、1. 物品搬入 2. 会場設営 3. インストラクター最終打合せを行った(開始17時、終了21時)研修当日は)スケジュール表参照

### 3. 研修結果

第1回目)

受講希望者数 26人 定員 15人

第2回目)

受講希望者数 32人 定員 15人

第3回目)

受講希望者数 28人 定員 18人

### 第1回目受講者アンケート結果

有効回答数 14 (背景卒後1年目から19年目) 内容抜粋

- ① これまでCPA(心肺停止)に遭遇したことがあるか? はい 11名 いいえ 3名
- ② 蘇生に参加した症例数 0例~10例
- ③ 研修全体の評価  
5段階評価の4が1名、5が13名
- ④ 今後インストラクターとして協力したいか?  
協力したい9名(できるかどうか不安)  
どちらでもない5名
- ⑤ その他

配布資料について 事前にテキストを配布してもらい予習して臨んだ  
指導内容、方法ともに分かりやすかった。楽しかった。

### インストラクターアンケート結果

インストラクター自己評価(5段階評価)

1(1人) 2(3人) 3(8人) 4(2人)  
5(2人)

気づき)教えていくことが非常に自分自身の学習になった。

### 第2回目受講者アンケート結果

有効回答数 10 (背景卒後2年目から26年目) 内容抜粋

- ① これまでCPA(心肺停止)に遭遇したことがあるか? はい 11名 いいえ 4名
- ② 蘇生に参加した症例数 0例~10例
- ③ 研修全体の評価  
5段階評価の4が3名、5が7名
- ④ 今後インストラクターとして協力したい

か?

協力したい 6名

どちらでもない 4名

### ⑤ その他

分かりやすかった。楽しかった。インストラクターのパワーを感じた。少人数で行ったのが細やかな指導を受けられたのがよかった。

### 第2回 インストラクターアンケート結果

インストラクター自己評価(5段階評価)

1(2人) 2(3人) 3(6人) 4(1人)  
5(1人)

気づき)自分のインストラクター技能について評価してもらい、改善したい。その他、インストラクター間の調整不足があり、もう少し計画を早く進めるべきだった。

## 4. 考察

### 1) 受講者側

2回の研修を通して、受講動機が「急変時に対応できるようになりたい」との要望が大半で、1年目から22年目まで経験の有無に関わらず、全員が事前学習を念入りに行い臨んでおり、モチベーションの高さが感じられた。また、少人数のグループ構成だったので連帯感も生まれ、実技に取り組んでいた。研修に対する5段階評価では、実技や指導内容に対し、ほぼ4か5で達成感が高かった。特に研修の目玉である「CPAのシュミレーション」において、急変場面の優先順位と役割分担の必要性を実感してもらったとアンケート結果より読み取れた。さらに、次回の研修でインストラクター希望者が半数を超えていたことは、指導者側に回り、さらにスキルを深めたい、知識を向上させたいとの表れであると考えられた。

## 2) インストラクター側

自己の指導力評価は5段階評価で2回とも3の「まあまあ」1「今ひとつ」と回答した人が多く、自己評価の低さを感じた。研修中はどのインストラクターも生き生きと指導しており、評価の低さは感じられなかったが、これには経験のあるインストラクターとの比較が評価の基準になっていた部分がある。理由のひとつとして、この研修で使用した“コンセンサス”といわれる技術指導案は指導ポイント的な断片的なもので、「導入」「発問」「展開」「指示」「助言」などの構成ではないため、実際のプレゼンテーションには経験の少ないインストラクターは、戸惑うことが多かったことが考えられる。この研修は体験学習中心であるので受講生側の理解度や反応を見ながら関わりつつ、指導内容の核である生命の鎖 (chain of survival) を実感できる指導案を作成していく必要を感じた。また、今回は、経験度別にインストラクターの指導評価ができていないため、ブース長などとの自己評価に格差はあったと思われる。しかしこれは今後、指導経験を積むことで解消されると考える。

さらに、インストラクター同士で技術評価を明確にしたいニーズがあるため、お互いのポジティブフィードバックが増え、達成感を持てるよう工夫していくことで今後、新たなインストラクターも増え、救命技術習得に関わるスタッフも増やす原動力となるのではないかと考え

る。

## 5. おわりに

現在、休日を利用して研修を行っており、研修前日までの打合せや準備もかなりの時間を要すことから、インストラクター同士の調整、時間確保が困難な状況である。これがインストラクターとしての継続参加を困難にしている印象もある。また、回を重ねるごとに、研修参加希望者が増え喜ばしい限りだが、現時点では参加希望者に見合うインストラクターおよび必要物品が調達できないのが現状である。従ってインストラクターの確保が研修会の継続に最も貢献するものと思われる。そして研修会の回数が増すことができれば需要に見合う救命技術研修が提供できるものと考え

## 参考文献

- 1) 日本救急医学会 ACLS コース企画運営特別委員会/編 平出 敦・山畑佳篤/著 日本救急医学会 ICLS(ACLS 基礎)コースガイドブック 羊土社
- 2) 佐藤みつ子ら：看護教育における授業設計 第2版 医学書院 1999